中部大学大学院　国際人間学研究科レポート

2026 Vol.28 GLOCAL



Forum

■ポーという〈名〉
——日本探偵小説の本格変格論争をめぐって —— 開 信介

■いかにして「意味」は共有されるのか
——会話分析からみる間主観性のメカニズム—— — 中馬 隼人

Notes

■ゲームを用いた伝統工芸品の関心度向上手法に
関する研究—四日市萬古焼を事例として— —— 山田 結子

■日本におけるマーラータンの定着過程
—名古屋市内の店舗を事例として— —— 余 珏玥

■「信仰之光—馬克思主義文献典蔵展」から見る
習近平思想 —— 丸山 正悟

■音環境アーカイブの研究 —— 坂本 董

News & Record

■第24回「院生の力」を開催

■第25回教員研究会を開催

中部大学大学院国際人間学研究科
Chubu University Graduate School of Global Humanics

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと
身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。

ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート『GLOCAL Vol.28』をお届けいたします。

本研究科は、1991 年に国際関係学研究科国際関係学専攻として発足しました。その後、2004 年に言語文化専攻と心理学専攻、2008 年に歴史学・地理学専攻が加わり、現在は四専攻（国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学）の博士前期課程･博士後期課程を擁する研究科となっています。国際関係、国際政治、国際経済、社会、文化、メディア、言語、言語教育、心理、歴史、地理など幅広い分野の約 60 名の教員が、大学院生の教育・研究を支えています。

さて、今日の社会では、世界各地で続く紛争や国家間の対立、気候変動など、さまざまな課題が深刻化しています。一方、日本でも人口減少が進むなか、外国人住民や海外からの人材が増加し、多様な文化的背景をもつ人々との共生が身近な課題となっています。また、生成 AI の急速な発展は、教育や研究、さらには人間の知識や創造性のあり方にも大きな変化をもたらしています。

こうした時代だからこそ、世界の動きを広い視野から捉えると同時に、自らが暮らす地域に目を向け、多様な人々や文化への理解を深めることが重要です。本研究科では､グローバルな視点とローカルな視点を結びつける「グローカル」な教育･研究を大切にしています。

本誌は創刊から 14 年を迎えました。国際関係、人文、社会科学の幅広い研究領域を有する本研究科において、教員と大学院生がそれぞれの研究成果を発信し、共有する貴重な場となっています。本号からも、本研究科における多様な教育・研究活動の一端を感じていただけるものと思います。

本誌を通して、本研究科の教育・研究活動への理解を深めていただけましたら幸いです。

2026 年 9 月 10 日

塩澤　正（中部大学大学院国際人間学研究科長）





Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　准教授

開　信介（HIRAKI Shinsuke）

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。専門は日本近代文学。とくに久生十蘭を中心とした戦前期の探偵小説・幻想文学を研究対象としている。著書に『久生十蘭作品研究――「霧」と「二重性」』（和泉書院、2023）、共著に山本昭宏編著『河内と船場――メディア文化にみる大阪イメージ』（ミネルヴァ書房、2025）など。

Forum

ポーという〈名〉――日本探偵小説の本格変格論争をめぐって

はじめに

今日ミステリーと呼ばれることの多い小説ジャンルは、かつて探偵小説と呼ばれていた。

日本において、ミステリー＝探偵小説が一般に知られるようになった功績は、明治中期の黒岩涙香の活躍に多くを帰せられる。涙香は自らが創刊した新聞『萬朝報』に盛んに欧米探偵小説の翻案を掲載し大いに部数を伸ばすとともに、日本初の創作探偵小説と目される「無惨」（『小説叢 第一巻』明治22・9）を著し、のちのジャンル隆盛の基礎を築いた。

大正末期には、海外探偵小説の翻訳を多数掲載していた雑誌『新青年』を土壌として、江戸川乱歩が登場する。

以後『新青年』を中心に小酒井不木、甲賀三郎、大下宇陀児、水谷準、夢野久作、海野十三、浜尾四郎、小栗虫太郎、久生十蘭、木々高太郎らが輩出し、日本の探偵小説界は発展期を迎えた。しかし、このようなジャンルの発展拡大にともない、大正末から昭和初期にかけて、探偵小説とは何かという論争が探偵小説文壇内部で生じるようになる。

なぜならば当時、犯罪や異常心理などの「探偵趣味」が盛り込まれこそすれ、謎の論理的解決を主眼とはしていない作品群もまた探偵小説の名のもとに一括されていたためである。このような作品群は、謎の論理的解決を主眼とする本格探偵小説に対し、変格探偵小説と呼ばれるようになる。変格探偵小説には、今日であれば幻想小説、怪奇小説、科学小説と呼ぶべきものが多く含まれていた。

前述の論争は当初、探偵小説の定義をめぐるものだったが、探偵小説の構成における抜きがたい形式性の問題をめぐり、次第に探偵小説が芸術たり得るかをめぐる論争へと拡大していく。

本稿では、このような一連の論争における甲賀三郎と大下宇陀児の論争、その裁定者としての乱歩の身振りを辿りながら、当時、論争の場において、エドガー・アラン・ポーの名がどのように機能していたかを瞥見してみたい。

周知のように、江戸川乱歩の筆名のもとにもなったポーは、論理的な近代探偵小説の発明者と目される一方、多くの幻想怪奇小説を書いた。論争の場において、ポーの名は探偵小説の芸術性を担保するとともに、ポーの二面性すなわち論理性と幻想怪奇性は、日本の探偵文壇におけるジャンル配置のねじれともつながっていたと思しい。本稿は、大正末から昭和初期の探偵文壇におけるポー受容を視座に、探偵文壇が抱えていた問題意識の一端を見取り図として示す試みである。

論争前史

今日、本格変格論争と称される、探偵小説の定義にまつわる一連の論争の先鞭をつけたのは、平林初之輔である。プロレタリア文学者だった平林は探偵小説にも筆を染め、活発に創作・評論活動を行った。

平林は「探偵小説壇の諸傾向」（『新青年』大正15・2）において、乱歩「屋根裏の散歩者」（『新青年』大正14・8）などを例に「精神病理的、変態心理的側面の探索に、より多く、もしくは全部の興味を集中」し、「異常な世界を構成」するものを「不健全派」、その対立軸を甲賀三郎らの名を挙げながら「健全派」と名付けた。そして「現代の日本の探偵小説作家」たちが「不健全趣味」「あまりに、人工的な、怪奇な、不自然な世界」に偏っていることを「退廃期の特徴」「いかなる芸術からも避くべき」と否定的に述べている。

ただし、その前年には、平林自身がポーを例証として「探偵小説が最高の芸術価値をもった小説であるという議論がなりたつ」（「日本の近代的探偵小説」『新青年』大正14・4）と述べていることには留意すべきだろう。この時点ですでに、ポーの名をもって探偵小説の芸術性を保証しようとする言説が認められる。さらに重要であるのは、そうであるにもかかわらず、その翌年、ポーの作風の一面である幻想怪奇性と通底するような作品群を「不健全派」として否定的に捉えていることである。

平林にとっては、ポーの論理性と幻想怪奇性は截然と分かたれていた可能性もある。しかし、ポーのこの二面性は、近代探偵小説の嚆矢とされる『モルグ街の殺人』（1841）においてさえ、異常な事件を推理した結果、異常な犯人を見出すという点で抜きがたく絡み合っていよう。

ポーを探偵小説の芸術性の根拠とした翌年に、ポー的なものを否定的に語るという平林の身振りは、のちの一連の論争における錯綜にポーの二面性が濃厚な影を落としていることを早い段階で示しているといえるだろう。

甲賀三郎と大下宇陀児（本格変格論争）

平林による健全派／不健全派の分類と前後して、健全派に対応するものを本格派、不健全派に対応するものを変格派として用語を定め、世に広めたのは、平林によって健全派と目されていた甲賀三郎とされる（中島河太郎『推理小説展望』双葉文庫、平成7・11）。

甲賀は本格派の領袖として、探偵小説の純化に邁進していくこととなる。

「探偵小説はこれからだ」(『東京日日新聞』昭和6・7・16〜17)において、甲賀はヴァン・ダインに拠りながら「探偵小説が小説の形式を借りた謎」であると断言し、連載中の大下宇陀児「魔人」(『新青年』昭和6・5〜昭和7・1)を「断じて探偵小説ではない」と裁断した。これに対し、大下は「探偵小説の型を破れ」(『東京日日新聞』昭和6・7・23)で「従来の探偵小説が、犯罪の謎を解くことに中心を置いていた」ことには「全然同意」ながらも、「探偵小説が、単に謎を解くだけのものであっていいか否か、そこにはなお多くの問題が残されている」とし、「ポウ」に言い及ぶ。

> 一見して謎を解くことにばかり終始しているかの如き、ポウの「モルグ街の殺人」においてすら、われわれはその中に多量の芸術的滋味を感ずることが出来るのである。

ここでも平林と同様に、ポーを探偵小説の芸術性と結びつける言説を確認できる。さらに重要な点は、ここで探偵小説を謎解きに限定しようとする甲賀の論難に対し、その対抗軸として「ポオ」の名が持ち出されていることであろう。「新しい企て」による探偵小説は「探偵小説と呼ぶことが出来なくなるかも知れない」が「それは毫末といえども差支えのないところ」という大下の反論には、「ポオ」がそうであったように、探偵小説には謎解きのみならず芸術性が必要であり、場合によっては芸術性が謎解きより優先されても差し支えないといった口吻が感じ取れる。

甲賀と大下の応酬に感想を求められた乱歩は、明確に「純粋探偵小説の限界については私も甲賀三郎君と同意見」とし、大下の誤謬を指摘している(「探偵作家の立場」『東京日日新聞』昭和6・8・31〜9・1)。ただし、繰り返し「純粋探偵小説」すなわち「本格」に関する限りと断っており、大下の立場を一概に否定し去っているわけではない。

この論争ののち甲賀は自らの立場をさらに先鋭化させる。「梅雨季のノートから」(『新青年』昭和9・9)では、改めて「探偵小説は断じて推理の小説」であると主張する。翌月同じく『新青年』誌面で、海野十三によって「探偵趣味の入つてゐるものは全部これを探偵小説の名で呼んでいいのではないか」(「探偵小説管見」『新青年』昭和9・10)と反論を受けると、「探偵小説講話」(『ぷろふいる』昭和10・1〜12)で「共に脊椎を持つ故に、蛇は馬なりとはいえない」とし、次のように続けている。

> 本格探偵小説というものは、要するに犯罪捜査小説であり、それに適当な謎とトリックを配し、読者に推理を楽しませるものであり、一面からいえば、文学としては幼稚で窮屈で、千篇一律的のものである。それに反して、変格物は要するに探偵趣味を多分に含んでいればいいので、取材自由、トリックの有無は問題にならず、より文学的に表現することが出来る。(中略)両者は極く僅少の共通点を除く他、蛇と馬の如く、冒険小説と恋愛小説の如く隔っている。

ここで明確であるのは、甲賀にとって本格探偵小説すなわち探偵小説とは形式上、芸術性に乏しいものであり、一方、変格探偵小説は探偵小説ではないがより芸術性を含みうるという二元論である。

大下も「探偵小説の批評について」(『新青年』昭和9・12)で改めて甲賀に反論を試みているが、甲賀はやはり「問題は探偵小説プラス芸術味が、所謂変格小説なりや、という点」とし、変格探偵小説が探偵小説ではない以上、「断じてそうでない」と応じている(「探偵小説講話」前掲)。この探偵小説が芸術たり得るかという論点はのちの甲賀三郎と木々高太郎の探偵小説芸術論争でも反復されることとなる。

乱歩とポー

では、以上のような激しい論争の場において、乱歩はどのように振る舞っていたのだろうか。すでに見たように乱歩はかつて甲賀の立場に賛意を示していた。しかし、昭和10年前後の乱歩はやや曖昧な立場をとっている。「鬼の言葉」(『ぷろふいる』昭和10・9〜12、昭和11・1〜2、5)で、乱歩は「探偵小説とは難解な秘密が多かれ少なかれ論理的に徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学」と述べ、さらに、ポーの「恐怖と幻想の作品を探偵小説と呼ぶのはひどく無理ではないか」と明言してもいる。一方で次のようにも述べている。

> 探偵小説を愛する程のものは、その始祖であるエドガア・ポオの探偵作品に不滅の愛を感じるのは申すまでもなく、更にポオの探偵小説以外の神秘と幻想の作品にも同じ深さの、或はそれ以上の愛着を覚えるのは極めて自然のことである。(中略)これは恐らく近代の探偵小説を愛するものに共通する所の心持であって、日本の探偵作家の大多数にもこの傾向を見て取ることが出来るのである。

さらに乱歩は、佐藤春夫「探偵小説小論」(『新青年』大正13・8)の、探偵小説を「豊富なロマンチィシズムという樹の一枝」「猟奇耽異の果実」「怖いもの見たさの奇異な心理の上に根ざして、一面また明解を愛するという健全な精神にも相い結びついて成り立っている」とする言葉を引きながら、「こういう文学こそ私達があこがれ且つ目ざしていたところのものであったのだ」「探偵小説を広義に解釈しようとする心持は、つまりここに在るのだと云っていい」と続ける。そして、佐藤の言葉に「ポオの全体の作品」と「ポオの仏訳者ボードレールなどの姿」を看取してもいる。以上の論旨はほぼ同じかたちで「日本の探偵小説」(『日本探偵小説傑作集』春秋社、昭和10・9)でも述べられており、乱歩の強いこだわりがうかがえる。

つまり昭和10年前後において乱歩は、論理的には以前と同様に、探偵小説の定義が甲賀と同じく限定的なものにならざるを得ないことを明確に認めてはいる。しかし「心持」としては、自らもその渦中にあった日本探偵文壇の形成史、そこでのポーへの憧れと深く結びついた「広義の探偵小説」を切り捨てることはできないというジレンマを露出させているのである。

おわりに

以上、ポーの名がどのように大正末から昭和初期の探偵文壇において機能していたかを瞥見してきた。当初、探偵小説の芸術性を担保するために持ち出されていたポーの名は、乱歩に至って、さらにジャンル配置の参照項としても機能していくさまが見てとれる。

甲賀に見られるように、変格探偵小説を本格探偵小説に比して、より芸術的であり得るとみなす見解を踏まえるならば、探偵小説の芸術性を担保する記号としてのポーの名と、本格/変格というジャンル配置におけるポーの二面性の影は、曖昧に重なりながら、強い潜勢力として機能していたことがうかがえるだろう。

乱歩はのちに「探偵小説の意欲」(『新評論』昭和11・8)でポーの二面性を「科学精神と芸術精神のかかる奇蹟的融合」と捉えなおし、探偵小説界の目指すべき創作理念として再配置していく。その理路と射程を明らかにすることは今後の課題としたい。

引用文献

『平林初之輔探偵小説選Ⅱ』論創社、平成15・10
『大下宇陀児探偵小説選Ⅱ』論創社、平成24・7
『甲賀三郎探偵小説選Ⅲ』論創社、平成29・2
『江戸川乱歩全集 第25巻 鬼の言葉』光文社文庫、平成17・2

※本稿はJSPS科研費23K12081の助成を受けた研究成果の一部である。



Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　講師

中馬　隼人（CHUMAN Hayato）

名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程単位取得後退学。2024 年 3 月に博士（学術）の学位取得。2022 年 4 月に中部大学人間力創成教育院語学教育プログラム（英語）に着任。2026 年 4 月より現職。専門は会話分析および相互行為言語学。日常におけるコミュニケーションを対象とし、人びとがいかにしてやりとりを成立させているのか、特に、会話参与者たちの理解の調整の方法について研究している。国立国語研究所共同研究員（「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」）。

Forum

いかにして「意味」は共有されるのか ——会話分析からみる間主観性のメカニズム——

はじめに

私たちは誰かと会話し、たいていの場合は言葉を尽くさなくても、相手にはおおむね言わんとすることが伝わる。しかし、ときには「わかったつもり」が後になって食い違っていたと分かることもある。そして興味深いことに、そうしたズレの多くは、さまざまな方略を用いて修正される。

「通じる」「ズレる」「修正する」この3つが同時に成り立っていることは、考えてみれば不思議なことである。このような不思議について、私は会話分析（Conversation Analysis）と呼ばれる方法論を用いて取り組んでいる（会話分析については、Schegloff(2007)、串田・平本・林（2017）などを参照）。

意味は「達成」される

言葉の意味について、私たちは素朴に次のようなイメージを持っているのではないだろうか。すなわち、意味は辞書や頭の中に「ある」ものであると。話し手がメッセージを伝達し、聞き手がそれを受け取る。したがって理解の共有はできていて当然の前提であると。しかしながら、辞書に意味が書いてあるのなら、なぜ会話でズレが起きるのだろうか。

会話分析では、これとは逆の見方で考える。すなわち、意味は会話のなかでその都度つくられ、話し手と聞き手によって協働的に構築される。言い換えると、理解の共有は前提ではなく「達成」であるということである。問うべきは「意味とは何か」ではなく「意味はどのように構築されているか」だ、ということになる。

ここで鍵になるのが「間主観性」（かなり大雑把に言えば、「いま、お互いの理解や認識が共有されている」状態のこと）という概念である。他者となぜ分かり合えるのかという問いは、哲学や発達心理学、言語学など、さまざまな研究分野において扱われてきた。会話分析では、間主観性を与えられた前提としてではなく、会話のなかで維持され、必要に応じて修復されつづける「達成」として観察する点で、他の分野とは異なる。

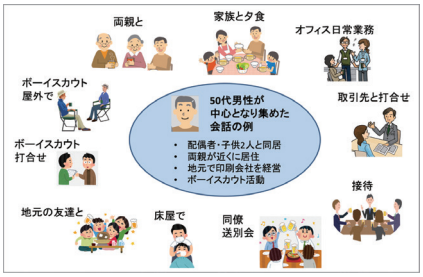
言語人類学者のニック・エンフィールドとジャック・シドネルが報告するラオスでの観察は、間主観性についての重要な示唆を与えてくれる（Enfield & Sidnell, 2022）。寺院で大きな鋸（のこぎり）を挽く2人の僧侶は、言葉を一切交わさない。ところが、熟練の織り手なら無言で進めるはずの機織（はたお）りに、不慣れな初心者が入った途端、その静寂は一瞬で破られる。「下に押して」「こう?」などの言葉を駆使して、お互いの理解の調整を求める言葉があふれ出すのだ。

私たちが言葉を交わすそもそもの理由は、「同じ身体を共有していない」という事実を補うためである。互いの理解がぴったりと重なり合っている間、上述の僧侶の事例のように、言葉を交わさずともやりとりが成立する。しかし、ひとたび認識のズレが生まれ、共同活動が揺らいだとき、言葉を駆使して理解の調整が行われる。調整の言葉が飛び交うその瞬間こそ、人間が沈黙の「阿吽(あうん)の呼吸」から一歩踏み出し、他者とのあいだに橋を架け直す「間主観性の交渉現場」に他ならない。

会話分析と会話データ

会話分析は、作例やアンケートではなく、実際に起きた会話の録音・録画をデータとする。0.1秒単位の間、言いよどみ、視線や身振りまで書き起こしたうえで、一つひとつの発言を直前の発言への応答として読み解き、「なぜ今、その言い方なのか」を問う。いわば会話の顕微鏡である。

私がデータ分析に用いるのは、国立国語研究所が構築し2022年に公開した『日本語日常会話コーパス』である（小磯ほか, 2023）。協力者自身が日常生活を録画する方式をとり、食卓、雑談、会議、散歩中まで多様な場面の映像つき日常会話が約200時間収録されている。以下の転記は、読みやすさのため専門的な書き起こし記号を簡略化して示す。



図：日本語日常会話コーパスの会話データの例（国立国語研究所ホームページより）

以下で、前述した「間主観性の構築」がどのようになされるのかについて、実際の事例をもとにみてみよう。

事例①　話し手の先回り

まず、話し手が相手の（誤る可能性のある）理解を先回りする実践を見る。具体的には、「Xって言っても」という言語形式を用いる方法である。友人同士の雑談で、Aが遠方の店舗に派遣されたアルバイトの経験について話している場面である。BはAが行っていた店舗の所在地を聞いて、そこによく野球しに行くことがあると言っているのが01行目である。

01　B：毎週、野球しに行くよ
02　A：行ってた（自分がアルバイトに）
03　　（0.7）
04　A：行ってた、って言っても、でも、
05　　結局3回しか入れて
06　　もらえんくって、これたぶん—
07　B：使えんかったのかな
08　A：そう 使えんかったんだろうな、
09　　と思う
※（数字）=沈黙の長さ（秒）

直前のBの「毎週行く」という発話の後の位置において、02行目のAの「行ってた」は、その店舗に習慣的に通っていたかのように聞こえかねない。Aは0.7秒の沈黙を挟んだのち、04〜06行目で「行ってた」を取り消すのではなく保持したまま、「って言っても」を差し込んで「結局3回しか」と程度を下方修正している。

このように、誤解が起きてから訂正するのではなく、起きる前に先回りして「受け取られ方」だけを微調整する。それにより、Aが提示した「行ってた」というこの場における意味を明示している。さらに注目したいのは、聞き手のBが07行目で「（Aがバイトの要員として）使えんかったのかな」と話の含意を先取りして言葉にし、Aが「そう」とそれを承認していることだ。このことから、「Xって言っても」という発話形式を用いて、AとBの間主観性が「達成された」ことが観察可能である。

事例②　聞き手の問い直し

次に、聞き手がある表現の意味を問い直し、その後、元の話し手とのやりとりにより、間主観性が達成される事例を見る。家族4人の食事場面で、眼鏡のフレームの話題になり、家族で唯一眼鏡をかけていない弟の翔真（兄は清隆）が、父親の眼鏡について質問をした後に01行目の父の発話がなされた。

01　父　：これは、ツーポイント
02　　ツーポイントっつうんだけど、ほら、
03　　フレームがないじゃん
　　((眼鏡を外して翔真に見せる))
04　　（2.2）
05　翔真：どうゆう意味?
06　父　：要は
07　母　：[枠がない
　　((自分の眼鏡を外し、フレームのあたりに触れる))
08　父　：[この、この、レンズ
　　((眼鏡を指さして翔真に見せる))
09　翔真：あー
10　清隆：これ、ここのさ、枠がないじゃん
　　((自分と父の眼鏡を指さす))
11　翔真：そゆ意味か
※((　))=身体の動作、[=発話の重なりを意味する。

「ツーポイント」は眼鏡の専門用語であり、眼鏡をかけていない翔真には通じていない。その最初の兆候は、言葉ではなく2.2秒という長い沈黙として現れる（04行目）。そこで翔真は05行目で「どうゆう意味?」と、父親に対して明確化を要求する。

注目したいのは、それに対する応答が辞書のような語の定義（たとえば「レンズを囲う枠がなく、ブリッジとテンプルの2箇所で直接レンズを固定する縁なし眼鏡のこと」のようなもの）ではないことである。父は自身の眼鏡を外して見せ（03行目）、指さして示す（08行目）。母はフレームのあたりに触れ（07行目）、兄は自分と父の眼鏡を並べて指さす（10行目）。モノと身体を総動員した、3人がかりの実演である。示されるのは一般的な定義ではなく「いま目の前にある、この眼鏡」を用いた個別具体的な意味であり、ほぼ全員が眼鏡をかけた食卓という環境そのものがその資源となっている。そして翔真の「あー」「そゆ意味か」（09・11行目）によって、間主観的交渉の達成が目に見える形で示される。

もう一つ注目したいのは、明確化を求められたのは父一人であるにもかかわらず、母と兄までがほとんど同時に説明に加わっている点である。理解のズレは、当事者2人（父と翔真）だけの問題としてではなく、その場にいる全員が引き受けるべき事柄として扱われている。ここには、眼鏡をかけている者（父・母・兄）とかけていない者（弟）という違いも関わっていると思われる。間主観性の維持が、集団的な営みとして組織されていることがうかがえる（なお、文字情報だけでは分かりにくいと思われるが、3人がいっせいに眼鏡を外して説明を始める様子は、人間の相互行為の面白さを感じさせてくれる。興味を持たれた方には、一度実際のデータをご覧いただきたい）。

今後の展望

これら2つの事例が示すのは、意味の共有が一方通行の伝達ではなく協働的な営みだということである。話し手は「Xって言っても」という発話形式を用いて聞き手の誤解を先回りし、聞き手は「どういう意味?」でその場の明確化を要求し、元の話し手はその環境に即した表現の意味を説明する。間主観性は、会話参与者たちのやりとりなしに成立しているのではない。それを維持・構築するための精巧な実践が、日常のやりとりの中に、さまざまな形で組み込まれているのである。

私の現在の研究テーマの1つは、「日本語会話における意味の協働的達成」である。ここで紹介した発話形式以外にも範囲を広げ、日常会話における意味の管理システムを記述することが目標である。理論的には、意味論と会話研究を橋渡しする「相互行為意味論」（Deppermann, 2024）という枠組みについて、日本語のデータから迫っていきたいと考えている。

引用文献

Deppermann, A. (2024). What do you understand by X? Semantics in Interactional Linguistics. In M. Selting & D. Barth-Weingarten (Eds.), *New perspectives in interactional linguistic research*. John Benjamins.

Enfield, N. J. and J. Sidnell (2022) *Consequences of language: From primary to enhanced intersubjectivity*. MIT Press.

Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I* (Vol. 1). Cambridge University Press.

串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房.

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香.（2023）「『日本語日常会話コーパス』設計と構築」『国立国語研究所論集』24, pp.153–168.



Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　博士前期課程 1 年

山田　結子（YAMADA Yuiko）

三重県四日市市出身。2026 年に中部大学コミュニケーション学科を卒業後、大学院に進学。祖父が四日市萬古焼の伝統工芸士であることから、自身も四日市萬古焼に強い興味関心を抱く。学部時代から四日市萬古焼の継承手段としてゲームを用いた研究を行っている。

Notes ゲームを用いた伝統工芸品の関心度向上手法に関する研究―四日市萬古焼を事例として―

研究背景

四日市萬古焼(以下、萬古焼)は伝統工芸品に指定されている半磁器である。日用品も芸術品も生産されており、特に土鍋は国内生産の大半が萬古焼となっている。しかし、生産地外における萬古焼の認知度が低いことが学部時代に学生へ実施した調査で判明した。このことから、将来を担う児童に焦点を当て、ゲームを用いたワークショップを通して研究を進める予定である。萬古焼を題材にした子ども向けのシリアスゲームを制作し、理解度・関心度の向上に有効か検証する。その結果から、伝統工芸継承におけるゲームの有効性を考察する。

先行研究

四日市市の公式WEBページ上の「四日市の工業」に関するデータでは、同市における窯業・土石製品製造業の事業所数、従業者数、製造品出荷額等は減少傾向にあることが読み取れる。またシリアスゲームについては、Frank（2007）がシリアスゲームは学習者の動機づけや学習意欲向上に有効であるとし、「楽しさ」と「学習内容」の両立が重要であるとしている。Stanković Elesini et al.(2022) も、主体的な学習参加を促進し、記憶保持や理解度向上に効果をもたらすとしている。ただし、現段階で伝統工芸品の継承を目的としたシリアスゲームの研究は存在していない。

学部時代の制作物

学部時代は、小学校低学年を対象にした萬古焼のミニゲーム集を制作した。子どもが遊びやすいように、プレイ時間が短くて簡単なミニゲームを4つ用意した。萬古焼についてどのような半磁器があるのかを知ってもらう絵合わせゲームと、萬古焼の制作工程である「成型」「焼成」「絵付け」の三つをモチーフにしたゲームである。

学部時代の制作物の課題点として、簡易のミニゲームであったため萬古焼の特色を活かしきれなかった点と、ワークショップ中に萬古焼への興味よりゲームに夢中になっている子どもがいたという点が挙げられた。研究の結果、このようなミニゲーム集形式のゲームは萬古焼の関心度向上手法として弱いのではないかという問いが生まれた。このように子どもに学んでほしい場合、ゲームの面白さとゲームの学びのバランスが非常に重要になってくると考える。

小学校高学年を対象にしたシリアスゲーム

学部時代の制作物の課題点を踏まえ、大学院では、対象を小学校高学年に変えてシリアスゲームを制作する。対象を変更した理由としては小学校4年生で伝統工芸や地域産業に関する学習が行われるため、この時期に萬古焼について学ぶことでより深い理解につながると考えたからである。現段階では、萬古焼が主に生産されている四日市市と菰野町を舞台にしたミッションクリア型のゲームを予定する。ゲーム概要として、「ばんこの里会館」の前に現れた敵を倒すために伝説の急須を作るパーツ集めを行っていくという内容を予定している。その際、ステージによって歴史、地域との関わり、使い方をアニメーションやクイズと共に学ぶことで萬古焼の知識を身につけてもらう。学習によって集めた急須のパーツを用いて、伝統工芸士による伝統技術を学びながらの急須作りを行うことで制作技術を伝えていきたい。最終的に知識を深めたうえで敵と対峙し、確認クイズなどの要素を絡めてゲームクリアを目指してもらう。学習によるレベルアップなどで子どもにとって興味を抱きやすい工夫も取り入れ、ゲーム性と学習内容のバランスを重視する。

大学院研究では、萬古焼について学ぶ行為そのものがゲーム攻略につながるシリアスゲームを設計する。これにより、単に萬古焼を題材としたゲームを制作するのではなく、ゲーム性と学習内容を一体化させる。

実践では事前・事後調査を行い、①理解度、②関心度、③行動意図の変化を測定する。その結果から、伝統工芸への関心を効果的に高めるためのシリアスゲームの設計上の条件を明らかにすることを目指す。

引用文献

1.四日市市.「四日市の工業」. https://www.city.yokkaichi.lg.jp/www/contents/1496210490192/index.html（閲覧日：2026年6月22日）

2.Frank, A. (2007). Balancing Three Different Foci in the Design of Serious Games – Engagement, Training Objective and Context. *Proceedings of the 3rd International Conference of Digital Games Research Association*, 567-574.(訳:七邊 信重)

3.Stanković Elesini, U.et al. (2022). Mobile Serious Game for Enhancing User Experience in Museum. *ACM Journal on Computing and Cultural Heritage*, *16*(1), Article 15.



Profile

国際人間研究科　言語文化専攻　博士前期課程２年

余 珏玥 (YU Jueyue)

中国安徽省出身で、武汉传媒大学を卒業後、2023年に日本へ留学した。日本で生活する中で、中国の食文化が日本の中で少しずつ知られるようになっていることに興味を持つようになった。現在は、中国の代表的な食文化の一つである「マーラータン」を対象に、SNSを通じて中国の食文化が日本社会にどのように伝わり、受容されているのかについて研究している。

Notes

日本におけるマーラータンの定着過程 ―名古屋市内の店舗を事例として―

はじめに

2024年ごろから、日本の都市部を中心にマーラータン(麻辣烫)が若者の間で注目され、SNSを通じて急速に普及している。名古屋市内の専門店も2024年初頭の4店舗から2025年12月には36店舗へ増加した。

特にTikTokやInstagramでは、食材の選択や「映える」見た目などを紹介する動画が多数投稿されている。本来中国の食文化であるマーラータンが、なぜ日本人に受け入れられ、定着したのか。

屋台料理から世界へ

麻辣烫（マーラータン）は、中国四川省周辺で生まれた、花椒と唐辛子による「麻辣」を特徴とするスープ料理である。日本では麻辣湯と表記されることもあるが厳密には誤りである。野菜や豆腐、肉類などから好きな具材を選ぶスタイルが特徴で、中国各地へ広がった。

日本には2010年代後半から海外進出を開始し、日本では2017年以降、池袋や高田馬場など中国人が多く集まる地域を中心に出店した。マーラータンについて取り上げた複数の新聞記事の報道をふまえると、それが大規模に知られ流行するようになった契機はSNS上での投稿によるという。

研究では手始めにSNSの分析（TikTokとInstagramでの検索）を行った。また、名古屋市に所在するマーラータンを提供する店舗へのインタビューも行なっている。



SNS 分析からみえること

SNS分析では、マーラータンが単なる料理としてではなく、具材を自由に選ぶ過程や食事までを含む「体験」として発信されていることが明らかになった。特に、豊富な具材や色彩、食材を選択する過程、第一人称視点などが視聴者の興味を引き、来店型動画では「自分も体験してみたい」という参加意識を生み出している。 SNS分析の結果、マーラータンはTikTok上で「未知の料理」から「体験したい流行グルメ」、さらに「日常的な食文化」へと段階的に変化してきたことが明らかになった。

初期には「これは何か」という認知形成を目的とする投稿が中心であったが、次第に具材選びや辛さ、実際の食事体験を紹介する動画が増加し、視聴者の関心も「何の料理か」から「自分も食べてみたい」へと変化した。さらに、動画の形式が多様化し、コメントも質問から感想や推薦へと変化することで、消費者自身が情報を共有する段階へ移行した。最終的には、店舗比較や具材の組み合わせ、自宅での再現などが見られるようになり、マーラータンは一時的な流行ではなく、日常的に消費・再現される食文化として定着しつつあることが示された。

店舗へのインタビュー調査からみえること

インタビュー調査では、実際の来店客は若い日本人女性が中心であり、SNSで話題になっていることをきっかけに、実際に体験したり、写真や動画を撮影したりする目的で来店していることが分かった。店舗側への調査からは、店舗自身がSNS上でマーラータンを積極的に宣伝していたわけではないことが明らかになった。

つまり、マーラータンの普及は店舗主導のSNSマーケティングによるものではなく、消費者がSNSを通じて自発的に情報を拡散することで形成されたと考えられる。さらに、来店後には店舗側が日本人客の嗜好に合わせて味や商品を調整することで顧客を定着させ、その体験が再びSNS上で共有されるという循環が生まれている。

今後の展望

消費者によるSNS上の情報共有と、店舗側による日本人消費者への適応がどのように相互作用し、マーラータンの認知・普及・定着につながるのかを明らかにしたい。

引用文献

Wachyuni, Suci Sandi and Lishia Yusuf, 2021, "Camera Eat First," *International Journal of Tourism & Hospitality Review, 8*(1): 62–70.

伊藤嘉浩・高橋優音，2014，「日本企業におけるSNSを用いたマーケティング戦略」『山形大学紀要（社会科学）』45(1): 91–127.

Ungvarsky, Janine, 2020, "Uses and Gratifications Theory," EBSCO Research Starters.

王昊凡，2023，『グローバル化する寿司の社会学』ミネルヴァ書房.



Profile
国際人間学研究科　歴史学・地理学専攻　博士前期課程 1 年
丸山　正悟（MARUYAMA Shogo）
中国近現代史や現代中国の政治・社会に関心を持ち、現在は中国共産党の指導思想について研究している。修士論文では、「習近平思想の形成と正統化に関する研究――毛沢東思想との比較を通じて」をテーマに、習近平思想が中国共産党の指導思想として位置づけられていく過程について考察している。

Notes

「信仰之光――馬克思主義文献典蔵展」から見る習近平思想

1. はじめに

中国共産党では、歴代指導者の理論が党の指導思想として位置づけられてきた。なかでも「思想」という名称が用いられていたのは長らく毛沢東思想のみであった。しかし2017年の中国共産党第19回全国代表大会において、「習近平新時代の中国の特色ある社会主義思想」が党規約に明記され、毛沢東以来初めて「思想」の名称を冠した指導思想として位置づけられた。さらに近年では、「2つの結合」「2つの確立」「2つの擁護」といった理念が提起され、習近平思想の理論的・政治的な権威が強調されている。

では、習近平思想はどのようにして中国共産党の指導思想として位置づけられ、その正統性が示されているのだろうか。本稿では、この問題を考える手がかりとして、2025年に中国各地で開催された「信仰之光――馬克思主義文献典蔵展」に着目した。

2.「2 つの結合」「2 つの確立」「2 つの擁護」

習近平思想の正統化を考えるうえで重要となるのが、「2つの結合」「2つの確立」「2つの擁護」である。まず「2つの結合」とは、マルクス主義の基本原理を中国の具体的な現実と結びつけること、そして中国の優れた伝統文化と結びつけることを指す。習近平は2021年7月の中国共産党成立100周年記念大会における演説において、この2つの結合を提起した。これによって、マルクス主義を中国の現実や伝統文化と結びつけながら発展させることが、中国共産党の理論発展の重要な方法として示された。

「2つの確立」は、2021年11月に採択された「中共中央関於党的百年奮闘重大成就和歴史経験的決議」において示されたものである。これは、習近平を党中央および全党の中核として確立することと、習近平新時代の中国の特色ある社会主義思想の指導的地位を確立することを意味する。

「2つの擁護」は、習近平総書記の党中央・全党における核心的地位を擁護するとともに、習近平を核心とする党中央の権威と集中統一指導を擁護することを意味する。つまり、「2つの確立」が習近平の政治的・思想的な地位を確立するものであるのに対し、「2つの擁護」は、その地位と党中央の指導を守るための政治原則として位置づけられている。

3.「信仰之光――馬克思主義文献典蔵展」

「信仰之光――馬克思主義文献典蔵展」は2025年2月に北京で開幕し、その後中国各地を巡回して開催された。約400点のマルクス主義文献が展示され、マルクス・エンゲルスの原典や手稿など貴重な資料も含まれていた。

本展は、「真理力量 薪火相伝」「手稿蔵書 経久弥珍」「経典巨著 思想豊碑」「『2つの結合』最大法宝」の4つの部分から構成されている。つまり、マルクス・エンゲルスの原典から始まり、マルクス主義の形成と伝播、中国におけるマルクス主義の発展を経て、最終的に習近平政権が提起した「2つの結合」へとつながる構成となっている。この展示構成に注目すると、習近平思想がマルクス主義とは切り離された新しい思想としてではなく、マルクス主義が中国に伝わり、中国共産党によって発展してきた歴史の延長線上に位置づけられていることが分かる。すなわち、本展ではマルクス主義の歴史的発展を示したうえで、その最新の展開として習近平思想を位置づけることで、その理論的な正統性を示していると考えられる。

また、本展の開催には中国共産党中央委員会党史・文献研究院など、党の理論研究や普及に関わる機関が関与している。展示においてマルクス主義の歴史を紹介するだけでなく、「2つの結合」を中心的なテーマとして取り上げていることからも、本展が単なる文献の紹介にとどまらず、党の思想を広める教育的な役割を担っていることがうかがえる。

4. おわりに

以上より、「信仰之光――馬克思主義文献典蔵展」は、マルクス主義に関する貴重な文献を紹介するだけでなく、マルクス主義の歴史的発展のなかに習近平思想を位置づけることで、習近平思想を「マルクス主義中国化の最新の成果」として示し、その理論的・政治的正統性を強化する役割を持っていると考えられる。本研究を通じて、政治理念だけでなく、それらがどのような形で人々に伝えられているのかに注目することで、習近平思想の権威が構築される過程を考察することができた。今後は、2つの思想を比較することで中国共産党において「思想」が持つ意味と、指導思想の正統性が形成される過程を明らかにしていきたい。

参考文献
習近平「在慶祝中国共産党成立100周年大会上的講話」2021年7月、https://www.gov.cn/xinwen/2021-07/01/content_5621847.htm
中共中央「中共中央関於党的百年奮闘重大成就和歴史経験的決議」2021年11月、中共19期6中全会、https://www.gov.cn/zhengce/2021-11/16/content_5651269.htm



Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　博士後期課程３年

坂本　菫（サカモト　スミレ）

2000年石川県金沢市に生まれる。2022年4月に国際人間学研究科言語文化専攻に進学。「今は当たり前に存在しているものも、未来から見れば貴重な地域の記録になる」と考え、「まち」を「音」でアーカイビングできないかと考えている。音とともに天候や場所などの情報も残すことで、未来の人が地域の姿を知ることのできるアーカイブを目指している。

Notes

音環境アーカイブの研究

地域資源とデジタルアーカイブ

近年では、地域資源の保存と継承を目的として、地域資料のデジタル化やデジタルアーカイブの構築が活発に行われている[1][2]。こうした取り組みにより、これまで現地でしか得ることのできなかった地域情報を、場所や時間を越えて取得･利用することが可能となった。

また、近年のデジタルアーカイブには、単に資料を保存するだけでなく、蓄積した情報を検索･再利用でき、さらに継続的に運用できるデータ基盤としての役割も求められている。

サウンドスケープとは

私たちは普段、音に囲まれて生活している。車の走行音、川のせせらぎ、鳥の声、風の音、人々の話し声など、私たちの身の回りには、その場所で日常的に聞こえている音が存在する。このように、ある場所で聞こえる音の総体を捉える考え方の一つが「サウンドスケープ」である。

サウンドスケープとは、1960年代にR.マリー･シェーファーによって提唱された概念であり、「風景には音が欠かせず、自然の音として聞こえてくる音には聞き手側の認識も含まれている」とされている[3]。この概念の提唱以降、音は単なる物理現象としてではなく、その土地の文化や生活環境、社会活動などと関係するものとして捉えられてきた。

音は地域資源になりうる

では、音に含まれた情報から地域についてどのようなことがわかるのか。例えば、車や電車などの乗り物の音が多く聞こえる場所からは、その地域の交通状況を、水が流れる音からは川などの水辺の存在を推測することができる。また、鳥や虫の声、風や雨の音などからは、季節や天候、周辺の自然環境を感じ取ることもできる。実際の地域空間では、天候、地形、人の活動、交通、生活活動、自然環境など、さまざまな要素が複雑に重なり合っている。そして、それらの違いは、その場所で聞こえる音にも反映される。例えば、同じ日付であっても、地域によって気象条件や地形、土地利用、交通状況などが異なるため、そこで形成される音環境も異なる。

このことから、音は単なる音響信号として捉えるだけではなく、その場で生じている出来事や、地域を取り巻く空間的･時間的な環境を含んだ情報として捉えることができるのではないかと考えている。

なぜ音環境は残ってこなかったのか

これまで音を記録する場合、収録対象や目的、すなわち「何を録音するのか」を事前に定めた上で収録することが一般的であった。そのため、どの音を記録する価値があると判断するかは、記録者の目的や視点に依存する。結果として、記録時点では重要であると認識されなかった音が記録されず、後から別の観点で地域を捉えようとした際に、必要な音情報が欠落している可能性がある。

また、環境音は写真ように一度に全てを確認することが難しく、確認に実時間を必要とする。そのため、地域の記録において音環境そのものが記録対象として扱いにくかった。さらに長期間にわたって継続的に記録したくても、機材や運用などの面で課題があったため、地域の音環境は、特定の出来事や場所を対象とした断片的な記録として残されることが多かった。特定の音を選択して記録するのではなく、その場所に存在する音環境そのものを継続的に記録することが必要なのではないかと考えている。

実践していること

本研究では、録音する音を人が選択することによる偏りをできる限り抑え、地域の音環境を継続的に記録･検索するためのシステムを開発している。また、録音した音声データだけを保存するのではなく、録音日時や場所に対応する気象情報などを取得し、音を区別する情報の種として記録する取り組みも進めている。

引用文献

[1] 岐阜女子大学デジタルミュージアム：『岐阜女子大学デジタルミュージアム』, http://dac.gijodai.jp/,（参照 2026-09-17）.

[2] 東京文化資源会議：『地域文化資源デジタルアーカイブ』, https://tcha.jp/pts/lcrd/,（参照 2026-09-17）

[3] R.マリー・シェーファー，鳥越けい子訳「世界の調律」平凡社　2006

News & Record

第24回「院生の力」を開催

第24回「院生の力」研究報告会が2026年7月1日（水）に開催された。院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうことが主な目的である。また、指導教授がコメンテーターとして議論に参加する形式をとり、院生の研究能力を高める場としても位置づけられている。

今回は言語文化専攻と歴理学・地理学専攻の博士前期課程所属の院生3名（山田結子氏、余珏玥氏、丸山正悟氏）が発表をおこなった。テーマは、それぞれ「ゲームを用いた伝統工芸品の関心度向上手法に関する研究―四日市萬古焼を事例として―」「SNSにおいて食文化はいかに語られるか―マーラータンを事例として―」「「信仰之光―馬克思主義文献典蔵展」から見る習近平思想 」である。三者のは発表はどれもこれからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。

発表者、教員、大学院生、一般参加者などの間で質疑応答が活発になされ、たいへん実り多い報告会となった。また、報告会終了後には交流会が開催され多くの参加があり、院生、教職員との交流ができ大盛況であった。











大学院 国際人間学研究科 主催

第 24 回研究報告会

院生の力

大学院生が、一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。特に学部学生を歓迎します！

2026年7月1日（水）15時20分～17時00分

2513講義室（25号館1階）

※終了後、交流会を開催予定。

15:20～15:50　山田 結子（言語文化専攻　博士前期課程１年）
発表題目：ゲームを用いた伝統工芸品の関心度向上手法に関する研究
――四日市萬古焼を事例として――
コメンテーター：河村　陽介 講師（言語文化専攻）

15:50～16:20　余　珏玥（言語文化専攻　博士前期課程２年）
発表題目：SNS において食文化はいかに語られるか
――マーラータンを事例として――
コメンテーター：王　昊凡 講師（言語文化専攻）

16:20～16:50　丸山 正悟（歴史学・地理学専攻　博士前期課程１年）
発表題目：「信仰之光――馬克思主義文献典蔵展」から見る中国の図書館
コメンテーター：一谷和郎 教授（歴史学・地理学専攻）

News & Record

第25回教員研究会を開催

第25回 国際人間学研究科教員研究会は、2026年7月22日（水）の研究科委員会終了後に2人の発表者を迎えて開催された。まず、言語文化専攻の開信介准教授が「久生十蘭『湖畔』を読む――合理と不合理」と題する発表を行った。氏は久生十蘭『湖畔』の作品構造に、合理的なものと不合理なものの緊張関係が作品に内在化されたトドロフの幻想文学の構造を看取できることを報告された。『湖畔』の作品構造には、同作が発表された1930年代日本の探偵小説界・思想界における言説・思想状況と関連がみられるとした。

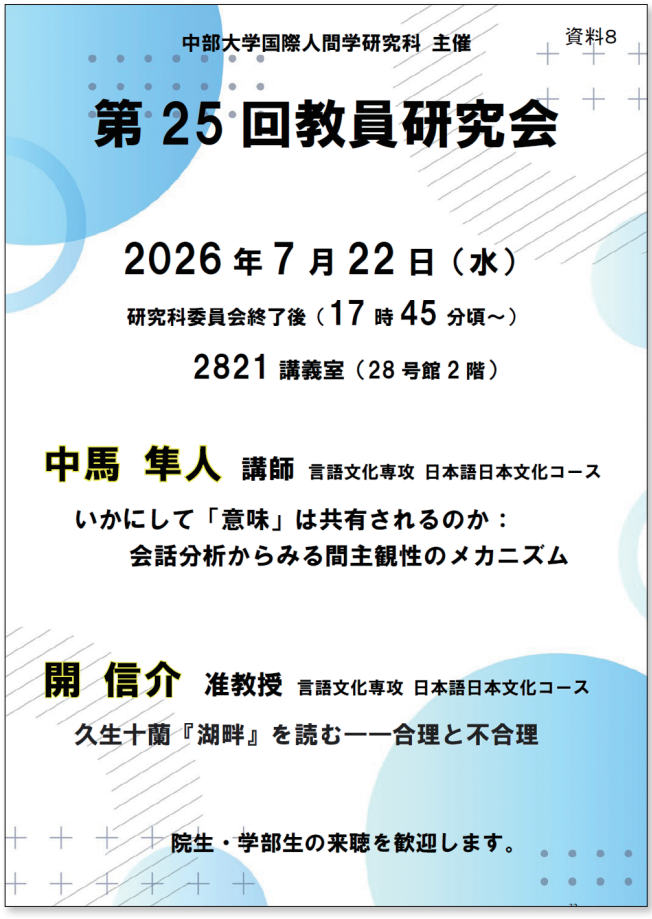


次に、同じく言語文化専攻の中馬隼人講師が「いかにして「意味」は共有されるのか―会話分析からみる間主観性のメカニズム―」と題する発表を行った。氏は具体的な2つの談話の事例を使って、意味の共有が一方通行の伝達ではなく、協働的な営みであることを説明された。間主観性という表現を使い、会話を維持・構築するための精巧な実践が、日常のやりとりの中に、さまざまな形で組み込まれていることを示された。



詳細は本冊子の2ページと4ページから始まる報告をご参照されたい。お二人の研究者による知的刺激に満ちた発表のあと、活発な質疑応答が行われた。





分野・入試情報

博士前期課程・後期課程　分野・コース

中部大学大学院国際人間学研究科では「国際」と「人間」をキーワードに、グローバルとローカルの2つを軸足として活躍できる人材を育てています。具体的には以下のような国際関係、国際政治・経済、国際社会・文化、言語、言語教育、メディア、心理、歴史、地理などの分野で、約60名の教員が指導学生の学位取得に向けて全力でサポートします。全ての分野に博士前期課程・後期課程があり、両課程とも以下のような専攻があります。指導教員の専門分野、奨学金、研究支援費、海外研修、指導教授候補への連絡方法などについては、ウェブページをご覧いただくか、国際人間学研究科事務室（chubu-inkn@fsc.chubu.ac.jp、0568-51-4144）までお問い合わせください。

専攻	分野
国際関係学	国際政治経済研究
	国際社会文化研究
言語文化	情報社会
	英語圏言語文化
	日本語日本文化
心理学	心理学
歴史学・地理学	歴史学
	地理学

入試情報

試験日程は10月と2月です。一般試験、社会人試験、留学生試験の3種類があり、基本的に、書類審査、筆記試験（専門科目・外国語能力を含む）及び面接試験による総合評価で合否を判定いたします。詳細は、右のQRコードより中部大学大学院入学試験要項をご覧ください。2027年度の情報は随時掲載していきます。入学試験要項および各種提出書類（研究計画書、論文要旨等）は、ウェブよりダウンロードしてください。各試験はインターネットによる出願となります。12/15（火）17：00～2月試験の説明会を予定しております。



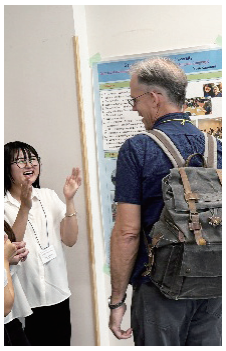
入学試験要項

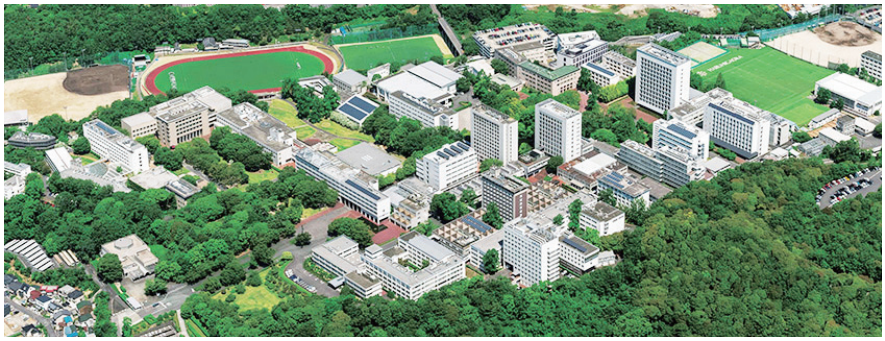
研究科総合情報

申請書類











中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋して、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローカルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習A, B
国際社会文化論専門研究演習A, B

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/健康心理学特論/認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/心理検査法特論/心理統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

心理学専門研究A～D

※各専攻での深い学修に加え、高度な俯瞰力や豊かな人間性を備えたリーダー人材の育成を目指した「持続社会創成教育プログラム」を入学時に選択することも可能です。

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

情報社会コース

研究基礎(情報収集、メディア·クリティシズム)/現代社会特論/情報社会特論/情報文化特論/現代メディア特論/情報コンテンツ制作特論/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通科目

近代世界表象体系

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

情報社会専門研究A, B
英語圏言語文化専門研究A, B
日本言語文化専門研究A, B

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習A～H
地理学専門研究演習A～D

Chubu University Graduate School of Global Humanics

●発行：中部大学大学院国際人間学研究科
●編集者：塩澤　正
●発行日：2026 年 10 月 20 日
●〒487−8501　愛知県春日井市松本町 1200
●中部大学国際人間学研究科（人文学部事務室）
●電話：0568-51-4144（直通）
●電子メール：chubu-inkn@fsc.chubu.ac.jp
●国際人間学研究科ホームアドレス：
https://www.chubu.ac.jp/academics/graduate-global-humanics/